

臍帯に縫着することによる臍形成を3例(一期的閉鎖2例, 二期的閉鎖1例)に行い, 良好な結果を得た。

〔症例1〕出生体重1526g, 欠損孔は30×30mmで創を上下に延長し, 一期的に還納・閉鎖。腹直筋・筋膜・切開部皮膚は3-0PDSにて結節縫合し閉鎖, 欠損孔は6-0PDSにて臍帯に丸く縫着した。術後4か月時, 臍形成部がヘルニアとなり臍形成手術を要した。

〔症例2〕出生体重2356g, 欠損孔33×25mmで創の延長はせずに, 一期的に還納・閉鎖出来た。腹直筋及び筋膜に4-0PDSにてタバコ縫合をかけ縫縮し, 皮膚は臍帯に6-0PDSにて縫着し創を残さず閉鎖した。術後1ヶ月時, 臍形成部がヘルニアとなったが自然閉鎖している。

〔症例3〕出生体重2158g, 欠損孔は30×30mm, 一期的閉鎖は困難であった為, 創を下方に1cm延長しプロトラクターを用いてサイロを形成した。生後15日に閉鎖術を施行。腹膜・筋膜に4-0PDSにてタバコ縫合をかけて縫縮し, 皮膚は6-0PDSにてタバコ縫合で縫縮した後に臍帯に縫着, 創を残さずに閉鎖できた。臍帯を腹腔内に陥入させていたため乾燥していない臍帯を皮膚に縫着でき臍形成とした。

【結語】筋層欠損部のタバコ縫合閉鎖および皮膚の臍帯への縫着は手技的にも容易で, 手術創を最小にすることのできる有用な手技と考えられた。

15 再発小児鼠径ヘルニア5例の検討

金田 聡・広田 雅行・内藤万砂文

長岡赤十字病院小児外科

〔症例1〕11ヶ月時Potts手術施行, 1年後に再発。鼠径管内はintactで, ヘルニア嚢は外鼠径輪付近で肥厚していた。

〔症例2〕3歳時Potts手術施行, 術直後に再発。腹膜前脂肪に縫合糸を認めたが, ヘルニア嚢はintactだった。

〔症例3〕3歳時Potts手術施行, 2ヶ月後に再発。鼠径管内に癒着を認めたが, ヘルニア嚢は

intactで, 縫合糸は認めず。

〔症例4〕4歳時Potts手術施行, 術直後に再発。鼠径管内, ヘルニア嚢ともintact。

〔症例5〕1歳時Potts手術施行, 2ヶ月後に再発。鼠径管内はintactで, ヘルニア嚢は外鼠径輪付近で狭窄を認めた。

【まとめ】小児鼠径ヘルニアの再発例では, 鼠径管とヘルニア嚢の確認が不十分であることが多いと推定される。なお, 症例は全例, 他院で初回手術を施行し, 再発したため当院を受診したものである。

16 結腸の閉塞が原因であったイレウスの2例

近藤 公男・大澤 義弘

太田西ノ内病院小児外科

〔症例1〕3歳, 男児。脳性麻痺で加療中。腹満, 嘔吐で当科紹介。腹部X-pで結腸の著明な拡張あり, 緊急手術。横行結腸が脾彎曲部付近で約180度捻転していた。血行障害は認めず, 横行結腸中央部付近を前腹壁に固定した。脳性麻痺に伴う呑気症による慢性的な結腸拡張が原因として疑われ, 浣腸を定期的に施行している。

〔症例2〕11歳, 女児。腹痛, 嘔吐で当科紹介。腹部X-p, CTで横行結腸の著明な拡張あり, 緊急手術。盲腸から上行結腸が著明に拡張し, その肛門側で屈曲, 捻転していた。更に同部から横行結腸左半までの結腸が後腹膜に固定されていた。移動盲腸と結腸の固定異常が原因とおもわれ, 後腹膜の固定を解除した。術後経過は良好であった。